Ｎｏ

　１９０６年（明治３９）年５月、ブラウンは帰米するために熊本を発ち、翌年には休暇を終え日本に帰る予定であったが、帰国後の多忙から病気になり、さらに夫人の病気も重なって、そのままサーレムに留まっていた。

　１９０８年（明治４１）年２月２３日、ブラウンの家庭に三人目の男子が生まれるが、生後間もなく天に召された。その後健康が回復し、同年９月５日ブラウン一家はサーレムを離れ、日本へ旅立った。

　「ＴＩＤＩＮＧＳ」１９０８年９月号「Ｏｆｆ ｆｏｒ　Ｊａｐａｎ」によると、ブラウン一家はＦ・Ｄ・スミス宣教師を伴って、９月１５日サンフランシスコから汽船モンゴリア号で日本へ向け出航した。

　同誌の同年１１月号「Ｏｕｒ Ｊａｐａｎ　Ｃｏｒｎｅｒ」には、ブラウン一行が無事航海を終え、１０月７日に長崎に到着した事が、モンゴリア号の写真入りで紹介されている。ブラウン一行は長崎から佐賀を経て、１０月１１日夕方、熊本に帰任した。

　ブラウン不在中、スタイワルトと共に熊本で伝道をしていたミラーは、１０月２１日新任地博多で伝道に専念するため熊本を発った。

　ブラウンに同行して来日したスミスは、アメリカ・ジェネラルカウンシル派遣の最初の宣教師であったが、東京に赴任するため１０月２６日には熊本を発ち、東京伝道開始の準備を始めた。後に路帖神学校で教えることになるウィンテルも１０月１４日長崎に帰着し、１６日家族と共に久留米に帰任した。

　１１月１日スタイワルトは帰任したブラウンに宣教師館（新屋敷町３３８番地）を譲り、新屋敷町４１２番地に移った。１１月２４日から三日間、熊本のブラウン宅（宣教師館）で第１３回教役者会が開催され、ブラウンとウィンテル２名の歓迎会が催された。

　熊本教会はこれを好機として２４、２５両日夜、水道町の教会と坪井横町の講義所で、伝道説教会を催した。

　ブラウンが熊本に帰任すると、スタイワルトと山内直丸の手によって既に熊本高等予備学校が開校され、活況を呈していた。

　第五高等学校や熊本高等工業学校の一流教授陣を配し、ルーテル教会最初の教育事業は順調に進んでいると見えた。しかしそれは、ルーテル教会としての神学教育やミッションスクールとしてのキリスト教主義教育を担うものではなかった。ブラウンは、ルーテル教会が本来取り組むべき教育事業の創設に着手する。その第一が路帖神学校の創立であった。

　神学校を開校するにあたり、神学生を募集しなければならない。１９０８（明治４１）年１２月にはリッパードとブラウンが博多に出張して、まず会員の入江徳太郎を神学生候補者として試験した。

　翌明治４２年２月２１日には高橋信太郎が熊本教会に転入会し、同教会出身の神学候補者となった。この二人に久留米教会の松本學明を加え、最初の３名の神学生候補者が揃った。

　熊本高等予備学校の運営を行いながら、ブラウンと共に神学校設立の準備を進めていた熊本教会の山内直丸牧師が、神学校開校７か月前の１９０９（明治４２）年２月、バージニア州ウィンチェスターのグレイス教会の教会学校に熊本教会の現況と神学校開校について次のように書き送っている。

　「熊本教会は、自給に向けての準備を進めている。具体的には、１９０５年２月から昨年のクリスマスまでの日曜日の礼拝献金を積み立ててきている。その献金は７５円に達している。

　これは自給への準備金であったが、神学校が開設されるので、この献金で日本語及び中国語の書籍を購入し、神学校に寄付したい。すでに、そのために２５円５０銭が使われた。神学校開校は、今年の９月を予定している。

　私は『キリストの生涯』、『教会史』、『キリスト教理論』を担当することになる。適切に教える自信はないが、他に代わりの人がいないので、しばらくは責任を果たさなければならない。

　けれども、私自身、神学校教授職という重責を担うほどの強さを持ち合わせていない。」（南部一致シノッドの機関紙『Ｌｕｔｈｅｒａｎ　Ｃｈｕｒｃｈ　Ｖｉｓｉｔｏｒ』１９０９．４．２９・青田勇訳）

　神学校開校へ向け、熊本教会も具体的な支援体制を整えつつあった。熊本教会の牧会と同時に神学校開校の準備のため、山内直丸牧師も多忙を極めていた。

　順調に学校運営が行われると見えた熊本高等予備学校が、明治４２年６月２６日突然閉鎖される（本書、第１篇、第３章、第４節、３）。軌道に乗っていた最初の教育事業の挫折に、関係者の落胆はかなりあったと思われるが、思いは既に路帖神学校へと向かっていた。

（『創設期から戦時下の時代』（九州学院百年史より）